



「グローバル気候変動学（伊藤忠グループ）」

寄付研究部門が発足

平成 3 年 10 月に設置された「グローバル気候学（伊藤忠グループ）」寄付研究部門が平成 8 年 9 月に終了しましたが、平成 9 年 4 月から新たに「グローバル気候変動学（伊藤忠グループ）」寄付研究部門が発足することになりました。この寄付研究部門は伊藤忠商事株式会社ほか伊藤忠グループ 12 社の寄付によるもので、寄付金総額 6 千万円で 3 年間（平成 9 年 4 月 1 日～平成 12 年 3 月 31 日）開設されます。本研究部門では地球温暖化などの地球規模の気候変動のメカニズムを解明することを目的としています。とりわけ対流活動などの小スケール擾乱が気候変動に及ぼす影響に関する基礎的研究を推進する予定です。担当スタッフは二宮洸三教授と沈学順助手で、他の研究部門スタッフと協力して研究活動を行います。

4 月 4 日には本センターで寄付研究部門発足記念式典・懇談会が開かれ、伊藤忠グループからは伊藤忠商事(株)中澤忠義取締役副会長はじめ 17 名の方々が出席され、センター教職員・大学院学生と活発に交流を行いました。

山中康裕助手が

「1996 年度日本気象学会堀内基金奨励賞」を受賞

山中康裕助手は「海洋の生物地球化学サイクルのモデリング」に関する研究で、「1996 年度日本気象学会堀内基金奨励賞」を受賞し、1996 年 11 月 6 日の日本気象学会秋季大会（名古屋市）で授与式が行われました。山中氏は、海洋大循環モデルに大気 CO₂、全炭酸、懸濁態有機炭酸（POC）、溶存態有機炭素（DOC）、栄養塩（リン）、溶存酸素等の化学量を組み込むことに成功し、海洋炭素循環に関する貴重な成果を出しました。山中氏のモデルは、さらに温暖化に伴う未来気候予測や古気候変動の研究にも発展可能であり、気候学研究の側面からも価値あるものと評価されました。

新任教職員の紹介

1. 沼口 敦 助教授

(気候モデリング分野)



当センターの設立とほぼ時を同じくして東京大学大学院を終え、半年間東京大学理学部助手を勤めた後、つくばの環境庁国立環境研究所に5年半ほど勤務していました。その間、センターの方々にはさまざまな形でお世話になり、CCSR / NIES 大気大循環モデルの開発などに携わってきましたが、1997年4月より、気候モデリング部門助教授としてこちらで働かせて頂くことになりました。現在の中心的な研究テーマを一言でいうと、気候システムにおける水の循環、ということになるでしょうか。地球の表層環境を特徴づけている水がどのように気候の形成維持に関わっているかを、雲・地表面などのさまざまなプロセスを検討しつつ多方面から考えて行くことにより、気候システムの力学の構築に貢献したいと思っています。主に気候モデル、特に大気モデルを使った研究が中心となりますが、GAMEなどのフィールド観測にも参加する予定で、衛星も含めた観測データとモデルとの橋渡しとなるような研究も、これから積極的に試みて行きたいと考えています。

2. Ilya Rivin 客員助教授

(比較気候モデル分野)

任期：1996年8月2日～1997年7月31日



During the last nine months I am enjoying my visit to CCSR from both scientific and personal points of view. I was graduated from the Leningrad Hydrometeorological Institute at 1983 and got Ph. D. degree from the same institute at 1989; now I hold senior scientist position at the St.-Petersburg Branch, P.P.Shirshov Institute of Oceanology of the Russian Academy of Sciences. My main research field is climate modeling, in particular modeling of the climate stability and variability. The visit to CCSR provides me with a wonderful opportunity to extend my research topics to an intriguing subject of interdecadal climate variability in the North Pacific, in cooperation with Professor Kimoto. CCSR is a leading research institute in the Pacific climate studies, so scientific discussions and cooperation with Japanese colleagues are extremely useful for me. I enjoy very much excellent working conditions and kind hospitality and assistance of CCSR staff. I wish to

express my appreciation to Professors Sumi and Kimoto for inviting me to CCSR and I am looking forward for further cooperation with CCSR scientists.

3. Yuzhu You 客員助教授

(比較気候モデル分野)

任期：1997年4月1日～1998年3月31日



Japan is my long expecting country to visit. I did my Master from the University of New South Wales, Sydney, and my Ph.D from the University of Sydney, Australia. My Ph. D thesis subject was 'the circulation and ventilation in the thermocline of the Indian Ocean'. After I finished my Ph.D, I went to MIT, Boston, USA, and Paris, France, also worked on the Indian Ocean. Before I came to Tokyo, I worked in the Institut fur Meereskunde, Kiel, Germany, on the South Atlantic Ocean. This time I work the Pacific Ocean in CCSR, University of Tokyo. I am grateful to Professor Suginozawa to have such a good opportunity to study the deep circulation of the Pacific Ocean, on both observation and model work. The visit was well planned when I was in Kiel, which lasts for one year. For this beginning few weeks, I have been impressed by enthusiasm and hospitality of CCSR staff and students. I do hope and believe that my visit will be successful.

4. 二宮 光三 客員教授

(寄付研究部門)

任期：1997年4月1日～2000年3月31日



4月1日付けで、寄付研究部門に参りました。これまで38年間気象研究所と気象庁に、その後1年間財団法人気象業務支援センターに勤務しておりました。再び研究機関に身を置く機会を得、嬉しく思っております。

今まで、メソスケール降水系と、それに関連する様々なスケールの循環系に興味を持ち調べて来ました。これまで一般的に、メソスケール現象の研究上の関心は主として特異現象に向けられて居た様に思われます。それも非常に大切な問題ですが、この他に気候システムに於ける降水系、特にメソスケール降水系の役割にも注目する必要があると考えております。例えば熱帯の熱収支解析と実際の積雲活動との比較検討、或いは、GCM やメソモデルの降水系と自然界のそれとの比較検討も大切だと思います。さらに基礎的な問題として、様々

博士論文一覧

な降水系のセンサス的な研究にも興味があります。このような問題に関心をお持ちの方々と仕事が出来る事を願っております。

5. 沈 学順 助手

(寄付研究部門)

任期：1997年4月1日～2000年3月31日



4月1日付で新規寄付部門の助手としてお世話になっていきます。昨年、私は中国蘭州大学大気科学学科で博士号を得て、引き続き気候センターで研究するようになりました。博士論文では、インドモンスーンの年々変動とその前兆現象について CCSR/NIES 大気大循環モデルを用いて研究しました。特にモンスーンの年々変動と関連したユーラシア大陸陸面プロセスを着目して研究を行ってきました。今後は、大気海洋結合モデルを用いて、ENSO、陸面過程、モンスーンといった気候システムの年々変動を左右するメカニズムを探っていこうと思っています。



羽角博康

Ocean's Role in Forming the Steady State of the Climate

(気候の定常状態形成における海洋の重要性)

(平成9年3月学位取得)

大気-海洋結合大循環モデルを開発し、気候の定常状態形成において海洋が果たす役割を調べるための数値実験を行った。とくに、海水の存在条件および季節変動の影響という二つの問題に焦点をあてた。

海水の存在条件に関しては、高緯度海洋に部分的に海水が存在するためには、海洋の熱塩循環による熱輸送を抑制するような境界条件的要因が必要であることがわかった。そのような要因としては陸岸・海底地形が特に重要なものであり、そうした制約がない場合には海水が全く存在しない状態もしくは全海面が海水に覆われる状態になる。

季節変動が定常状態に及ぼす影響に関しては、季節変動の存在が海洋の循環および極向き熱輸送を活発化する一方で、大気の極向き熱輸送を抑えるように働くことがわかった。また、太陽放射の季節変動の周期に対する大気-海洋結合系の定常状態の感度は、変動周期が一年よりも短い領域において急激に大きくなるという結果が得られた。



平成8年度修士論文一覧

赤井靖雄**簡易大気海洋結合モデルによる熱帯域の気候形成の研究**

年々変動だけでなく気候値、季節サイクルも再現することを目標とした熱帯域の簡易大気結合モデルを構築した。大気海洋単体ではある程度満足のものであったが、結合気候は領域内で SST 一様となる非現実的なものとなった。この原因は、大気モデルの作る風応力の弱さにある。人為的に風を強めることによって、このモデルでは、東太平洋に冷舌の現れる東西非対称な気候とそうでない様な気候との間の多重平衡が現れ得ることを見出した。この多重平衡は湧昇過程の非線型性から生ずる不安定な海気相互作用によるものである。

片桐秀一郎**AVHRR 赤外チャンネルによる上層雲の光学的特性の導出に関する研究**

赤外チャンネルを用い、上層雲の雲微物理特性（有効粒径および光学的厚さ）の導出を行なうアルゴリズムについて研究し、NSW 法（Normalized Split Window Method）を開発した。このアルゴリズムを用い全球解析を行なった結果、赤道域では中・高緯度よりも上層雲の粒径が小さいという結果を得た。

鈴木英一**アジアにおける梅雨季の大気循環場の変動とその構造**

熱帯域まで含めた範囲のアジアを対象領域にして、北半球の春季～夏季にあたる梅雨季の大気循環場の特徴的な構造を理解する目的で、客観解析データ（GANAL）や赤外放射量（OLR）データなどにもとづいて解析を行なった。

その結果、梅雨季でのアジアの大気循環には中緯度帯と熱帯の間に Interaction があり、2つの周期帯（15～30日周期帯、30～50日周期帯）の変動では、梅雨期ではインド洋～インド大陸付近からの、盛夏期では熱帯西部太平洋からの影響が、中緯度帯の大気循環の変動に対して関わっていることが明らかとなった。

滝川雅之**CCSR/NIES AGCMを用いた大気化学結合モデルによるO₃、NO_x等の数値計算**

CCSR/NIES AGCM を用いて O₃、NO_x、Cl_y、CFCs 等の 24 種の気体と 59 の化学反応を含む成層圏大気化学結合モデルを作成した。全球一様な初期条件および境界条件を用いて 3 年程度走らせたところ、N₂O および CH₄ については濃度の鉛直勾配および季節によるピーク位置の移動をよく再現し、力学的な振る舞いの再現性が良好であることがわかった。オゾン

の季節変動については量的にはやや多いものの、定性的にはほぼ再現できていた。

中野英之**世界海洋大循環モデルにおける熱塩循環の季節変動**

世界海洋大循環モデルにおいて、海面温度/塩分を季節変動させた場合の海洋の応答を研究した。それにより、季節変動する海面温度/塩分を与えた場合に形成される深層水は、最も寒い時期の海面温度/塩分を定常的に与えても再現できないことが分かった。内部の季節変動は対流により励起された波動で説明できた。また、計算手法に関し K. Bryan (1984) の提唱した加速法の変動問題への適用性を、実験的手法の下で誤差を見積もることにより示した。

中村恵子**カルマンフィルタを用いた海洋4次元データ同化と観測ネットワークデザインに関する研究**

カルマンフィルタは、理論的には優れた4次元データ同化手法であるが、膨大な計算コストがかかる。ここでは、赤道海洋を対象とした簡単な浅水モデルにカルマンフィルタを適用し、その特性を活かした実用可能なスキームの検討を行った。コストのかかる誤差共分散行列の時間発展は省略可能であるが、変数間共分散は考慮すべきである、との結論を得、GCM を用いた誤差共分散推定法を提案した。また、TOGA-TAO アレイを想定した観測ネットワークシミュレーション実験（OSSE）を行い、南北・東西間隔、流速計の効果等有効なブイ配置を検討した。

松山志保**熱帯西部太平洋における対流活動の年々変動と北半球の大気循環**

17年間の「ひまわり」による上層雲量データ等を用いて、夏季熱帯西部太平洋の対流活動の年々変動の特徴、海面水温や大気循環との関係について解析した。対流活動の変動には（1）赤道付近の東西変動、（2）亜熱帯-中緯度の間の南北変動が存在する。前者は ENSO に伴う変動であり、後者は ENSO と季節内変動に伴う変動が混在している。海面水温-対流活動-大気循環の特徴は 1987、88 年を境に変化していることがわかった。

留 小強**=次元数値モデルによる非定常加熱に対するHadley循環の応答のシミュレーション**

二次元軸対称モデルに基づき、季節変化を考慮した非定常加熱を与えて、Hadley 循環のシミュレーションを行った。非

訪問研究者等

定常加熱の効果としては、循環や熱の南北輸送を強め、赤道東風の幅を広げ温帯傾圧波の活動を变化させ、より高緯度に影響を与えることが挙げられる。SST の季節変化を考えると、実際の気象において3月から5月にかけての北半球セルの強さの急減、10月から11月にかけての北半球セルの強さの急増現象が非定常加熱によって良く再現できた。

渡部雅浩

冬季北半球における大気循環の急激な変化と10年規模変動

本研究は、1989年を境として北半球中高緯度域の大気・海水などに生じたと言われる10年規模の変化を詳しく調べた。観測データの解析から、1989年前後の冬季の大気循環の変化の3次元的特徴を記述し、それらの変化が、中高緯度で卓越する10年規模変動と密接に関わっていることを示した。この変動は、中緯度の海面水温(SST)、北大西洋の海水、ユーラシアの積雪といった場にも見い出され、特に秋のユーラシア東部での積雪偏差が大気を強制している可能性が示唆された。大気に対するSSTおよび積雪偏差のインパクトを調べた大気大循環モデル(AGCM)による応答実験の結果、ユーラシア東部での秋の積雪偏差は、SSTの6割程度の強さで半球規模の大気循環に影響を与えることが確認された。

シンポジウム・研究会・講演会等

- 1996.10.04 オープンハウス(パネル展示と解説)(300名)
~05
- 1996.11.13 伊藤忠シンポジウム(於:伊藤忠商事(株)東京本社300名)
- 1996.12.03 アジアモンスーン気候システムに関する国際研究集会(於:京都市国際交流会館200名)



外国人客員研究員

| | |
|--------------|---|
| Jeff Ridley | ロンドン大学研究員 平成8年9月12日~平成8年9月21日 |
| Renhe Zhang | 中国科学院大気物理研究所助教授 平成8年11月4日~平成8年12月2日 |
| Wang Wei | コロンビア大学ラモンドバティ地球観測所博士研究員 平成9年1月6日~平成9年2月6日 |
| Rao Ruizhong | 中国科学院安徽光学精密机械研究所助教授 平成9年1月20日~平成9年2月28日 |

中国政府派遣研究員

| | |
|------|------------------------------------|
| 任 宜勇 | 新疆気象局気象業務中心 平成7年10月1日~平成8年9月30日 |
|------|------------------------------------|

人事異動

| 日付 | 職名 | 氏名 | 内容 |
|--------|--------------------|------------------------|----|
| 8.6.30 | 客員助教授(外国人研究員) | 胡 増臻 | 離任 |
| 7.1 | 技術補佐員 | 白井あずさ | 着任 |
| 7.31 | 技術補佐員 | 森田 篤子 | 離任 |
| 8.2 | 客員助教授(外国人研究員) | リビン イリア | 着任 |
| 8.31 | 臨時用務員 | 堀込規美子 | 離任 |
| 9.1 | 臨時用務員 | 内藤 明子 | 着任 |
| 9.30 | 客員教授(寄付研究部門) | 畚野 信義 | 離任 |
| 9.30 | 寄付研究部門教員(助手) | 沈 学順 | 離任 |
| 9.30 | 寄付研究部門教員(助手) | 高田久美子 | 離任 |
| 10.1 | 教務補佐員 | 沈 学順 | 着任 |
| 10.16 | 研究支援推進員 | 長谷川洋子 | 着任 |
| 11.10 | 客員教授(外国人研究員) | コンドラチエフキリル ヤコフィレヴィチ | 離任 |
| 11.18 | 研究支援推進員 | 丹波 万紀 | 着任 |
| 12.12 | 技術補佐員 | 石井伊久美 | 着任 |
| 9.2.17 | 技術補佐員 | 白井あずさ | 離任 |
| 3.31 | 技術補佐員 | 磯谷 久枝 | 離任 |
| 3.31 | 技術補佐員 | 田高由起江 | 離任 |
| 3.31 | 教務補佐員 | 沈 学順 | 離任 |
| 3.31 | 事務補佐員 | 丸山 明子 | 離任 |
| 3.31 | COE 研究員 | 倉本 圭 | 離任 |
| 3.31 | 研究支援推進員 | 長谷川洋子 | 離任 |
| 4.1 | 助教授 (気候モデリング分野) | 沼口 敬 | 着任 |
| 4.1 | 客員教授(寄付研究部門) | 二宮 洸三 | 着任 |
| 4.1 | 寄付研究部門教員(助手) | 沈 学順 | 着任 |
| 4.1 | 客員助教授(外国人研究員) | ユウ ユジョウ | 着任 |
| 4.1 | 研究支援推進員 | 丸山 明子 | 着任 |
| 4.1 | 技術補佐員 | 山口 裕子 | 着任 |

平成9年度 共同研究採択一覧

| 研究区分 | 研究課題 | 研究組織 | センター 担当教官 | 経費 (千円) |
|------|---|--|--------------|------------|
| 特定共同 | 東大気候システム研究センター及び気象研究所の世界海洋大循環モデルのパフォーマンスの相互比較 | 気象庁気象研究所 遠藤昌宏 研究室長 石崎 廣 主任研究官 小畑 淳 研究官 山中吾郎 研究官 | 杉ノ原伸夫 | 1,500 |
| 特定共同 | 気象モデルを用いた同化と予測可能性の研究 | 気象庁気候・海洋気象部エルニーニョ監視センター 桜井邦雄 所長 石井正好 技官 | 木本昌秀 | 1,000 |
| 特定共同 | 大気モデルによるハドレー循環と傾圧波動の相互作用の研究 | 埼玉工業大 佐藤正樹 講師 | 高橋正明 | 1,000 |
| 特定共同 | 領域型気候モデルの開発に関する研究 | 京大大学院理学研究科 木田秀次 教授 里村雄彦 助教授 気象庁気象研究所 佐々木秀孝 主任研究官 | 住 明正 | 1,490 |
| 特定共同 | 高分解気候モデルを用いた下部成層圏慣性重力波の研究 | 京大大学院理学研究科 佐藤 薫 助手 長岡技術科学大学 熊倉敏郎 助手 | 高橋正明 | 1,220 |
| 特定共同 | 衛星データを用いた日本付近の降雨の解析 | 気象庁気象衛星センター 操野年之 調査官 | 新田 勅 | 10 |
| 特定共同 | オゾン化学輸送モデルの開発と数値実験 | 九州大学大学院理学研究科 宮原三郎 教授 広岡俊彦 助教授 三好勉信 助手 吉川 実 院生 山口達也 院生 四ツ谷直紀 院生 | 高橋正明 | 1,490 |
| 特定共同 | 極域海洋における鉛直混合の過程について | 東京水産大 長島秀樹 助教授 納谷美也子 院生 | 杉ノ原伸夫 | 300 |
| 特定共同 | 全球土壌水分データセットの評価と感度実験 | 気象庁数値予報課 佐藤信夫 数値予報班長 隈 健一 予報官 室井ちあし 技術職員 | 住 明正 | 100 |
| 特定共同 | 大気海洋結合モデルの初期値化及び季節予報可能性について | 気象庁数値予報課 佐藤信夫 数値予報班長 吉川郁夫 予報官 霧木 義 予報官 | 木本昌秀 | 200 |
| 特定共同 | 海洋大循環モデルの高精度化に向けた乱流拡散率の全球的マウピング | 東大海洋所研 日比谷紀之 助教授 東大気候システム研究センター 杉ノ原伸夫 教授 古恵 亮 助手 | 杉ノ原伸夫 | 1,500 |
| 特定共同 | 実測データとモデルの入出力の比較 | 東京都立大学理学部 松山 洋 助手 | 住 明正 | 100 |
| 特定共同 | 亜熱帯収束帯の生成機構の研究 | 弘前大学理学部 児玉安正 助手 | 新田 勅 | 320 |
| 特定共同 | 海洋大循環モデルによるデータ同化実験と予測可能性の研究 | 東大大学院理学系研究科 和方吉信 助教授 | 木本昌秀 | 500 |

| 研究区分 | 研究課題 | 計 究 組 織 | センター 担当教官 | 経 費 (千円) |
|------|---------------------------------|---|--------------|-------------|
| 一般共同 | 大気海洋結合系の経年変動に関する準備的研究 | 北大大学院地球環境科学研究科 山崎孝治 教授 謝 尚平 助教授 石渡正樹 助手 | 木 本 昌 秀 | 1,550 |
| 一般共同 | 海水・海洋結合モデルにおける高密度水の形成 | 北大大学院地球環境科学研究科 池田元美 教授 北大低温科学研究所 大島慶一郎 助教授 北大大学院理学研究科 身延庄七郎 助手 渡辺達郎 研究員 | 杉ノ原伸夫 | 1,370 |
| 一般共同 | 大気海洋陸面相互作用による海洋循環の季節・経年変動のモデル研究 | 東大大学院理学系研究科 山形俊男 教授 升本順夫 助手 鍵本 崇 院生 | 高 橋 正 明 | 1,500 |
| 一般共同 | グローバルなモンスーン気候の季節内・季節及び経年変動の研究 | 東大大学院理学系研究科 松本 淳 助教授 木村圭司 院生 糸矢恵美 院生 コルチス・ミケル 院生 梶原 誠 院生 ベルナディア 院生 | 新 田 勅 | 500 |
| 一般共同 | 赤道波と対流の相互作用に関する研究 | 東大大学院理学系研究科 山岬正紀 教授 大内和良 院生 | 新 田 勅 | 1,300 |
| 一般共同 | 対流圏・成層圏物質交換に関する数値実験 | 京大大学院理学研究科 余田成男 助教授 石岡圭一 学振研究員 山家孝司 院生 山根省三 院生 赤堀浩司 院生 | 住 明 正 | 1,300 |
| 一般共同 | 非静力学高解像モデルによる海洋鉛直対流の研究 | 九州大学大学院理学研究科 中島健介 助手 | 杉ノ原伸夫 | 895 |
| 一般共同 | 10年スケールの海洋変動におけるsubduction過程の役割 | 北大低温科学研究所 竹内譲介 教授 久保川厚 教授 深町 康 助手 乾 朋子 院生 野中正見 院生 | 杉ノ原伸夫 | 1,485 |
| 一般共同 | 放射対流平衡の二次元数値実験 | 中京学院大 東大大学院理学系研究科 名大大気水圏科学研究所 岩朝美晴 助手 阿部 豊 助教授 田中 浩 教授 | 住 明 正 | 275 |
| 一般共同 | 大気低周波変動のモデル研究 | 和歌山大学教育学部 伊藤久徳 教授 | 木 本 昌 秀 | 300 |
| 一般共同 | 梅雨前線帯に発生するメソスケール降水の研究 | 北大低温科学研究所 藤吉康志 教授 川島正行 助手 | 新 田 勅 | 1,135 |
| 一般共同 | 混合層モデルを組み込んだ海洋大循環データ同化モデルの研究 | 京大大学院理学研究科 淡路敏之 教授 石川洋一 学振研究員 中村知裕 院生 | 杉ノ原伸夫 | 1,200 |
| | 合 計 | | | 23,540 |

セミナー報告

セミナー

- 1996.06.10 Prof. K. Ya. Kondratyev (Research Center for Ecological Safety, Russian) Global change and remote sensing : a general survey of priorities.
- 1996.06.12 沈学順氏(東大気候システム研究センター) CCSR/NIES AGCM でシミュレートされた premonsoon season における陸面プロセスについて
- 1996.06.19 岩朝美晴氏(中京学院大学)放射対流平衡大気中の水蒸気分布の維持機構-煙突ではない積雲の効果-
- 1996.06.26 高田久美子氏(東大気候システム研究センター) 気候システムにおける凍土の役割について
- 1996.07.10 河宮未知生氏(東大気候システム研究センター) 表層環境と海洋生物の相互作用
- 1996.07.15 Prof.K.Ya.Kondratyev (Research Center for Ecological Safety, Russian) Global climate change. Basic aspects of observations and numerical modeling.
- 1996.07.17 米沢東夫氏(日立、公共事業部 主任技師) AGCM の並列化について
- 1996.07.24 趙南氏(東大気候システム研究センター)熱帯大気の季節内振動及びスーパークラスターについて
- 1996.07.31 Dr. Steven Pawson (Institute fuer Meteorologie, Freie Universitaet Berlin) Feature of the climatology of planetary waves in the northern stratosphere
- 1996.08.19 柳田達雄氏(北海道大学電子科学研究所情報数理)雲のモデル化とシミュレーション
- 1996.09.11 鈴木英一氏(東大気候システム研究センター) 夏季におけるアジアの大気循環について ~ 熱帯と中緯度の 30 ~ 40 日周期振動を中心に ~ 渡部雅浩氏(東大気候システム研究センター)北半球中高緯度の 10 年規模変動あるいは気候レジーム
中村恵子氏(東大気候システム研究センター) 赤道域での大気海洋結合 4 次元データ同化
松山志保氏(東大気候システム研究センター) 熱帯西部太平洋における対流活動の年々変動
- 1996.09.12 片桐秀一郎氏(東大気候システム研究センター) シーラスの全球解析アルゴリズムの開発
滝川雅之氏(東大気候システム研究センター) CCSR/NIES 大気-化学モデルでの NO_x 等の様子について
赤井靖雄氏(東大気候システム研究センター)大気海洋結合モデルによる熱帯の気候形成の研究
中野英之氏(東大気候システム研究センター) 深層水の気候変動に対する応答
- 1996.09.18 大塚清敏氏(大林組技術研究所フロンティア技術研究室) エントロピーの概念の気候学への応用に関する話題提供
- 1996.09.25 Prof. Ilya Rivin (St.-Petersburg Branch, P. P. Shirshov Institute of Oceanology, Russia) Linear versus nonlinear thermohaline interdecadal variability.
- 1996.10.14 Prof. K. Ya. Kondratyev (Research Center for Ecological Safety, Russian) Atmosphere as a colloidal medium: impact of clouds and aerosols on climate.
- 1996.10.24 赤祖父俊一氏(アラスカ大学)アラスカ大での研究について
- 1996.10.30 Dr. Peter Gleckler (Lawrence Livermore National Laboratory) AMIP II, An Atmospheric Model Intercomparison Project,
- 1996.11.11 羽角博康氏(東大気候システム研究センター) 気候の定常状態形成における海洋の重要性
- 1996.11.13 松山洋氏(東京都立大学理学部地理学科) An analytical study on the seasonal/interannual variability of the continental-scale hydrological cycle.
- 1996.11.14 Dr. Kayo Ide (Dep. of Atmos. Sciences, UCLA) An example of observing System design and fluid-mixing estimation. Use of extended Kalman filtering for vortex systems.
- 1996.11.20 Dr. Kayo Ide (Dep. of Atmos. Sciences, UCLA) Analytical study of atmospheric radiative equilibria in a simple column model
- 1996.11.25 江守正多氏(東京大学総合文化研究科)陸面大気水循環におけるフィードバック過程の研究
- 1996.11.28 Prof. Bernhard Stauffer (Dep. of physics, University of Bern) Fast climate changes, new results by a better synchronisation of ice core record from Greenland and Antarctica.
- 1996.12.02 Dr. Larry Anderson (Harvard University) Hypotheses of upper ocean nutrient coupling, and physical-biological ocean modeling studies in the Northwest Atlantic.
- 1996.12.09 Prof. Huang Ronghui (Institute of Atmospheric Physics, Chinese Academy of Science) The temporal and spatial variability of the water vapor transport by Asian Monsoon.
- 1997.01.13 Dr. Wei Wang (IDGO, Columbia Univ.) A Numerical Study of the North Pacific SST Variability: 1974-1989.
- 1997.01.22 日暮明子氏(東大気候システム研究センター) 衛星リモートセンシングによるエアロゾルの特性の全球解析
- 1997.01.23 Prof. Steve Ackerman (University of Wisconsin) Observations of cloud forcing using collocated AVHRR and ERBE data

- 1997.01.27 Prof. Young Ho Seung (Inha University, Korea) A Simple Model of Gravity - Forced Intrusion of the Kuroshio Water onto the East China Sea Shelf .
- 1997.02.12 中野英之氏 (東大気候システム研究センター) 世界海洋大循環モデルにおける熱塩循環の季節変動
片桐秀一郎氏 (東大気候システム研究センター) AVHRR 赤外チャンネルによる上層雲の光学的特性の導出に関する研究
滝川雅之氏 (東大気候システム研究センター) CCSR / NIES AGCM を用いた大気化学結合モデルによる O_3 、 NO_x 等の数値計算
留小強氏 (東大気候システム研究センター) 二次元数値モデルによる非定常加熱に対する Hadley 循環
- 1997.02.13 赤井靖雄氏 (東大気候システム研究センター) 簡易大気海洋結合モデルによる熱帯域の気候形成の研究
中村恵子氏 (東大気候システム研究センター) カルマンフィルタを用いた海洋 4 次元データ同化と観測ネットワークデザインに関する研究
松山志保氏 (東大気候システム研究センター) 熱帯西部太平洋における対流活動の年々変動と北半球の大気循環
渡部雅浩氏 (東大気候システム研究センター) Abrupt Shifts in the Atmospheric Circulation and Associated Decadal Climate Variations in the Northern Hemisphere Winter
鈴木英一氏 (東大気候システム研究センター) アジアにおける梅雨期の大気循環場の変動とその構造の応答のシミュレーション
- 1997.03.03 Dr. Michael A. Spall (WoodsHull Ocean Inst.) Baroclinic Jets in Confluent Flow
- 1997.03.10 岡田直資氏 (北大地環研) 非静水圧モデルを用いた鉛直対流の数値実験
池田元美氏 (北大地環研) 大陸棚に沿う高密度水の混合 : POM による数値実験 : 概要
- 1997.03.12 三好勉信氏 (九州大・理学部) 南半球成層圏におけるオゾン輸送について
廣岡俊彦氏 (九州大・理学部) 南北両極のオゾン減少に関する GCM 数値実験
- 1997.04.07 柳井迪雄氏 (カリフォルニア大学ロスアンゼルス校・大気科学学部) " The Role of the Tibetan Plateau in Climate and Its Variability "
- 1997.04.16 沼口敦氏 (東大気候システム研究センター) 地球をめぐる水-モデルを用いた大気水循環の研究あれこれ
- 1997.04.30 二宮洸三氏 (東大気候システム研究センター) アジアモンスーンの水収支
- 1997.05.09 Prof. Lawrence A. Mysak (Dept. of Atmospheric and Ocean Sciences, McGill University) ' Can increased poleward oceanic heat flux explain the warm Cretaceous climate ? ' ~ dealing with a simple (2D) coupled atmosphere ocean system ~
- 1997.05.28 Dr. Yuzhu You (CCSR) " Seasonal variation of thermocline circulation and ventilation in the Indian Ocean "

